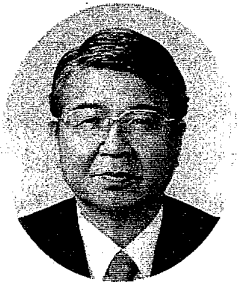


## 提 言



# 地域とのかかわりを 深める教育への期待

鹿児島経済大学教授

北 川 茂 治

## 1 「覚えること」の教育から「問うこと」の教育へ

今回の学習指導要領の改訂において、小・中・高校すべての段階の学校で「総合的な学習の時間」が新設されることになった。このことは、我が国の学校教育課程史の中で、まことに画期的なことであるといえよう。

教育課程審議会は、中央教育審議会の答申を受けて、今回の教育改革をこれまでの教育の「基調の転換」を図ることだとして、「これからの学校教育においては、これまでの知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと、その基調の転換を図り、子供たちの個性を生かしながら、学び方や問題解決などの能力の育成を重視するとともに、実生活との関連を図った体験的学習や問題解決的な学習にじっくりとゆとりをもって取り組むことが重要である」と唱え、このような趣旨のもとに、「総合的な学習の時間」の創設を提言したのである。

新設された「総合的な学習の時間」の指導の「ねらい」を学習指導要領では、次のように規定している。「(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」

この指導の「ねらい」(1)には、今回の教育改革で強調されている、教育の「基調の転換」の内容が端的に表されている。すなわち、「自ら課題を見付けること」の教育への転換である。これまでの「覚えること」の教育から、新たな「問うこと」の教育への転換である。

ところで、「問うこと」の教育においては、何を対象にして何を問うのが問題である。問うべき中身として何を課題として設定するのか。それは「ねらい」(2)に明示されている。「問題の解決や探究活動」を通じて「自己の生き方を考えることができるようにすること」、つまり、その学習活動の意義・価値が「自己の生き方」をどのように高めるかという観点のもとに、学習課題を主体的に選択して設定することである。

## 2 創造力の源泉としての、ふるさと体験

いつのことだったか記憶は定かではないが、確かNHKのラジオ放送だった。三人の作曲家を囲んでの座談会の談話を伝えていた。司会者が三人の作曲家に作曲をめぐるのエピソードを聞き出そうとしていた。作曲する際に心に思い浮かぶものは何かと、問い掛けた。そしたら、そのうちの一人がぽつりと自分が子供の時代に過ごした故郷を思い浮かべると答えた。次の作曲家も、私も同

じだ、故郷だと言った。もう一人の作曲家は、子供のころに過ごしてその後一度も帰ったことはないがと、前置きして、自分の子供時代に過ごしたことがある土地、自分にとって第二の故郷とでもいう土地での体験だと、懐旧の情にふけっているような口吻で述べた。まるで前もって示し合わせたかのように三人とも、自分の子供時代に過ごした土地、故郷であると口をそろえて言い切った。

作曲家たちの創造力の源泉は子ども時代に過ごした故郷であった。しかも、三人が全く同じことを口にするのだから、驚いた。偶然の一致に過ぎないような気もしたが、私にはうなずけるところがなくもない。私にも同じ思いがあった。私の場合は、創造力というよりは人間関係をつくることのよさを故郷の体験で養っているように思われる。子供は知らず知らず、心ひかれる海や山、川、そしてそんな自然の懐に抱かれて住む人々の心の温かさをしっかり捉えているものである。子供時代には、意識できないかもしれないが、奥深い心の琴線に触れたことが柔らかな感性に受け止められて脳裏に深く刻まれているのだろう。そういう体験の積み重ねがあつてこそ、故郷は豊かなイメージを紡ぎだす創造力の源泉となるに違いない。

### 3 地域とのかかわりを深める教育への期待

三人の作曲家の談話に触れて、幼少年期の故郷の体験がその作曲家たちの音楽の創造に深く作用していることが分かった。

幼少年期に具体的な事物に直接触れて得られた体験こそ、後年の創造力の源泉になっているというのは、なにも作曲家に限らないのではなかろうか。だれでも、ふるさとの体験が人生全体を豊にしてくれる源泉となるといってよいであろう。幼少年期に自然の事物や多くの人々に触れ親しみ、深いかかわりを持つことこそ、人生の真の豊かさをもたらし、人としての豊かな幸せを支えてくれる基になるのである。

ところが、現在、子供たちのふるさとの体験の現実はどうなっているだろうか。身の回りには豊かな物質的な環境があるものの、情報化や都市化、核家族化、過疎化などの急激な進行によって、地域社会とのかかわりは、かえって希薄になってきているのではなかろうか。子供たちは現在、地域の自然や地域の人々、地域の文化とどのようなかかわりを持ち得ているだろうか。

子供たちの生活体験や自然体験、勤労体験の不足が教育界で問題視されるようになってから久しいことである。それから様々な調査研究が行われ、学校における体験的活動への対応が教育課題として取り上げられてきた。直接体験の不足は子供たちの心身の発達や学習活動へも影響することが指摘されてきた。具体的な生活体験や自然体験、勤労体験などは、直接に目で見たり、体で触れることのできる地域とのかかわりなしには成立しない。

今こそ、「総合的な学習の時間」の課題として、地域とのかかわりを深めるような学習課題を学校全体の課題の一つとして取り上げられるよう期待する。鹿児島県は豊かな自然に恵まれているだけではない、題材は実に豊富、多種多様、地域の自然や景観はもとより、動植物、環境、歴史、伝統、言語、文化、民俗、伝説、歌謡、衣・食生活、産業などがある。地域の素材だから、じかに触れることができる、これが何と言っても最大のメリットである。地域の題材だから、係わる者がみんなまで共に深く学ぶことができる、これも大きなメリットである。